

海國兵談序（読み下し文）

今のいわゆる「兵」なるもの、用兵の理ことわりを言う。今のいわゆる「武備」なるもの、これに備えることなり。「兵」これ理ことわりに屬ぞくす。「備」これ事に屬ぞくす。時勢しこうして使うのみ。いわゆる「武備」なるもの、攻守の具そなうる則のり、論ずるを亡うしなうのみ。その区域の広狭・山河の險易・古今の異同・人物の強弱・天度の寒暄・敵国の大小遠近・緩急・理不利・衰旺すいおうを測るに至らんとす。各おのおのその権に従い、而しかうしてその宜しきを制す。徐おもむろに謀り、予め慮すれば、必ず遺漏いろう有ること無きなり。而しかうして後も、その用爰ようえん備焉びえんは、ただ是これのみにあらざるなり。予め慮するは、懈おこたるにあらず。講習の務め、益々久しく益々精しく、研究して周あまねく致いたす。至らざるところ無し。雄武俠烈の風撓たわまず。則すなわちそれぞれ反そむく心ある無く、化外おそは惛おそれ伏す。而して或いは敢えて犯す莫なし。それこの如ごとくして、以て万々世に至り、人民永く兵革乱離へいかくらんりの苦を受ける莫なさしむるものなり。得て期すべきや。業わざまた大なるかな。凡およそ兵は臨時の機を為し、備は大平の業を為す。大平の時、武備は張らず。則すなわち兵を講ずる所無し。兵の理ことわり明らかならず。則すなわち武備を張る所無し。事理相待つのみや。我が神祖開業以来、昇平既に久しき。中外事無し。世の兵というもの、唯ただ理の究きわまりなり。卒の施す所無し。今や実、国家ここに武を備うるの時なり。而して今のこれを備うる者、徒いたずらにその理を談じ、その方を按あんぜず。旧儀しやうぎに率したがい、講習くわんじゆを忽ゆるがせにす。流風漸ようやく移るとも、因循苟且いんじゆんこうしよ、その終には廢弛はいしに歸す。兵、これ武備とともに均ひとしく空理くうりに屬ぞくせしむ。嘆なげかざる可べけんや。また猶なほ、兵革乱離の間は人情

が文を学ぶを懈おこたるがごとし。時勢しの然しからしむるのみ。兵は臨時りんじの機きを為し、備そなは大平の業を為す。大平の時、備は止み、事に屬ぞくせんと為す。事を捨て、理を取る。未だその可よしとするを見ず。然りと云えども、時勢しこれを然しからしむるなり。大いに勉強べんきやうするに非あらざれば、断じてこれに及あたぶ能あたわざるなり。予よの友に林子平りんしへいという者あり。慷慨こうがいの士しなり。性恬澹寡欲てんたんかよく。心に大義存す。その親族略縉紳ほぼしんしん多く、子平を蔑さげすみ視る。家の為ならずと。酷はなはだ跋渉ばつしやうを好む。凡そ邦域内の経歴けいれき殆ほとんど徧あまねし。その自らの處ところ、常に兵革の間かんに在るがごとし。藍樓糲食草行露宿らんるれいしよく。陶陶とうとうとして自適じてきと云う。嘗かつて憤然ふんぜんとして志を発す。因りて学ぶ年有り。著書架たなを満つ。皆、当世の策を言う。この編名を海國兵談かいこくへいだんと曰いう。その意、以て為す。我国は海國かいこくなり。海寇かいこうへの備在るを要す。故に以ていづくんぞ目とせんや。その論説は確実にして激切。その人を目で観るが如し。傍かたわらに海外の奇策、古今来未だ嘗かつて見聞せざるものを採り、これを出す。以て我国防禦の大方を観るに足る。その所志、偉えらしというべけんや。今の世に当たり、予あらかじめ慮するは、懈おこたるにあらず。講習の務め、益々久しく益々精くわしく、研究して周あまねく致いたす。至らざるところ無し。則すなわち所謂いわゆる以て万々世に至り、人民永く兵革乱離の苦を受ける莫なさしむるものなり。それ乎斯ここに在らん歟や。それ于斯ここに在らん歟や。

天明丙午夏五月念六 仙臺 工藤球卿撰